

令和 2 年 9 月 14 日現在

機関番号：32644

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2019

課題番号：17K04250

研究課題名(和文) ケアを基盤とする共生社会構築のためのケア概念確立と社会福祉教育への反映

研究課題名(英文) Establishing the concept of caring in order to realize inclusive society based on caring and to reflect on social work education.

研究代表者

妻鹿 ふみ子 (MEGA, FUMIKO)

東海大学・健康学部・教授

研究者番号：60351946

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,700,000円

研究成果の概要(和文)：「ケア倫理」が包摂された「地域共生社会」を実現するためには、新自由主義的な価値観が社会を席卷することを排し、人びとがケアの責任から逃げない社会を作り、排除/包摂の問題に丁寧に目を向けて議論を行い、そのようにして社会の中にケアを充足させることが必要である。ケアを充足させることで、われわれは、気遣い合うケア関係が存在する社会 ケアをわれわれの問題と捉える社会 応答しあう関係性にケアの可能性が開かれた社会 日常生活を支えるモデルが存在する社会 ケアが民主的で変革的な「民主主義的な社会」の根幹に位置づけられている社会を手に入れることができるのである。

研究成果の学術的意義や社会的意義

ケア概念を、政治的なそれとして整理された研究はまだ多くない。ケアを社会のアジェンダにしていくためには政治的な捉え方が不可欠だとする政治学者Trontoの議論やケアは実践至上の現場主義に陥りがちであるから、政治的・社会的価値を持つ概念として議論することが重要だとする哲学者Held等のケア倫理の議論をケアの本質を議論する際に依拠する先進的な議論として採用し、ケアを中心に据えた「地域共生社会」の構築を哲学や福祉社会学の研究者と、社会福祉学という実践の研究者とが共同で研究し、ケア中心の社会のあるべき像を描き、その社会構築の意義と社会実装の課題を示したことが本研究の学術的な特色である。

研究成果の概要(英文)： In order to realize "inclusive society" including "care ethics", neo-liberal values do not swamp the society, and a society where people do not escape the responsibility of caring. It is necessary to carefully discuss and discuss the issue of inclusion, and thus to fulfill caring in society.

Thus, we can obtain (1) a society in which a caring relationship that cares for each other exists (2) a society in which care is considered to be our problem (3) a society in which the possibility of care is open to the reflective relationships(4)a society in which a model that supports daily life exists (5) a society in which caring is positioned at the root of a democratic and transformative "democratic society."

研究分野：社会福祉学 公共哲学

キーワード：ケア倫理 地域共生社会 社会実装 新自由主義 包摂/排除 公私二元論 民主主義 フェミニズム

1. 研究開始当初の背景

「ケアを基盤に据えた社会をつくる」ための理論的検討が十分に進んでいない、という研究代表者の問題意識が背景にある。すなわち、医療や介護の場面でのケアをめぐるのは、いったんは社会化したはずの「ケア」が再び「私事化」する状況が立ち現れていることを鑑みると、ケアを社会全体で責任を負う体制を構築することが必要である。加えて、そのような責任を負う体制が社会に実装されるためには、何らかの形で教育の場への反映も不可欠であると考えた。

以上の問題意識のもと、「ケアを基盤に据えた社会」とはどのような社会なのか、またケア中心社会におけるケア概念はいかなるものであるかを、政治学者ジョアン・トロント、哲学者バージニア・ヘルドのケア倫理の議論に依拠しつつ、多様な領域の研究者の共同研究によって、多面的な視角から明らかにするべく、本研究をスタートさせた。

研究代表者は、先行的な研究において、人びとが支え合うという行為を支える規範として、ケア倫理を採用しうることを明らかにしてきた（妻鹿 2015、2016）。その際、倫理としてのケアのみならず、行為、実践、活動としてのケアに言及して議論を展開しているトロント、ヘルドのケア論が、規範理論としてのケアと実践としてのそれとを架橋するケア論として秀逸であることを提示することができた。ただし、先行の研究においては、彼女らのケア論を多角的に、またより深く分析し、「ケアが中心的な課題となる社会」（トロント）がどのようなものであることを十分に明らかにすることはできなかった。本研究は、トロント、ヘルドのケアの議論を手がかりに、異なる学問領域を持つ共同研究者間で議論を深め、抽象的なケア倫理と実践としてのケアとをつなぎ、ケア倫理の研究においても、ケア実践の研究においても依拠することのできるケア論、ケア概念の確立をめざしたいと考えた。

2. 研究の目的

「誰もが支え合う共生社会」（厚労省 2015）を支える規範としてのケア倫理がいかなるものであるのか、また、共生社会との異同はどのようなものであるのかを探りつつ、めざすべき、「ケアが基盤となる社会」とはいかなる社会であるべきかを、学問領域の異なる共同研究者との議論を踏まえて明らかにする。すなわち「ケア中心の社会は地域共生社会といえるのではないか」という仮説を検証すると共に、あるべき「ケア中心の社会像」を構想する。加えて、やや抽象度の高いケア倫理、ケア概念の議論を経て明らかにした倫理、概念をめぐる研究成果を踏まえ、「ケアが中心に据えられた社会において、人びとがケアへの責務を果たすことができるようなケアのあり方」を検討し、教育の場に反映させる方策を検討する。

3. 研究の方法

本研究は、研究メンバーがそれぞれの専門領域において「ケア論」「ケア概念」の研究動向を主に文献研究によってレビューし、その成果を研究会で報告し、議論を深めることで、「ケア中心の社会は地域共生社会といえるのではないか」という仮説を検証しつつ、本研究会としての「ケア概念」「ケア論」を確立しようとした。

研究の方法は、文献研究を踏まえた上での研究会での議論による概念の構築である。そして、そのアウトプットとしての共著の論文の上梓、各研究者の研究領域における学会での個別の口頭報告である。最初の2年の研究会での議論によって、大学や専門学校における、資格取得のためのカリキュラムに「ケア論」を生かすよりは、ケア現場でケアを実践する無償、有償の実践者の実践に資する「ケア論」を明らかにすることで、「福祉教育へのケア論の反映」をさせることが妥当であることが確認された。そのため、最終年度には、社会実装のためのケア概念を検討し、加えて実践の当事者を交えた拡大研究会セッションにおける議論を行い、そのアウトプットと

して共著の論文を執筆して、最終的な本研究の成果とした。

共同研究会においては、初年度は岡野八代とバージニア・ヘルドのケア倫理をめぐる著作を批判的に読み込んだうえで議論し、ケアをめぐる論点を整理するなど、書評会を行った。2年目は、ジョアン・トロントの“Caring Democracy”を各自が深く読み込んだうえで、それぞれの研究フィールドにおけるケア論の研究も踏まえた上で「ケアが中心となる社会」を構想し、キーとなる概念として、気遣い関係としての Caring with を導き出した。3年目は理論研究としては、三井さよのケア論に触発された「ベースの支援」という概念を挿入することで、Caring with を実践に耐えうるものに深化させると共に、caring with が社会実装に耐えうるものかどうかを、ケア現場の2名のゲストスピーカーを招聘した拡大研究会によって検証した。

研究成果については、「共生社会の構築に寄与するケアとは—ケアの社会実装のための問い直し—」として共同執筆の論文を公表（千葉大学 人文公共学府研究論集）すると共に、各研究者がそれぞれの専門領域の視角から論文化したものをとりまとめ、報告書として形にした。

4. 研究成果

ケア概念は、実践に資するものとしては社会福祉学の領域で、ケア倫理ないしはケア学として、哲学・倫理的な視座から、それぞれ交錯しないまま研究が行われてきた。一定の研究の蓄積はあるものの、このような縦割り、蛸壺化した研究では、ケアが社会の中心に位置づけられることは難しい。研究代表者はこれまでの研究において、公共哲学や政治思想と社会福祉学とを接続させてケアを論じてきたが、それぞれの領域の研究者たちとの共同研究によってケアを研究することで、不足するケアの社会的認知を高めることができるとの構想のもと、本研究に着手した。

ケアを政治的、哲学的に論じてきた内外の論者の骨太の著作を丁寧に読み込み、議論することで、ケアを社会の中心的なアジェンダにしていくためには何が必要なのか、また、圧倒的にケアが不足するのはなぜなのか、そして、ケアが社会の中心にあり、充足されている社会とはどのような社会なのかを明らかにすることができた。そして、介護福祉士養成などの教育プログラムの反映には至らなかったものの、現場で現にケアに取り組んでいる有償、無償のケアの担い手にとって、役立つケア論を提供する、という点で、教育への反映ができたのではないかと考える。

ケアが不足する、というケアをめぐる問題状況が起こるのはなぜか。それは、1つには、新自由主義的価値観（もしくは生産性至上主義）がこの社会を席卷しているからであり、2つには、ケアの責任から人びとが逃げようとしているからであり、3つには、「包摂と排除」の問題が十分に検討されていないからである。これらの問題状況を検討しつつ、めざすべきは、「ケアが充足する社会」である。

過少の状態を脱して、ケア概念が確立された社会とは以下に示す社会である。

(1)Caring with（気遣い合うケア）関係が存在する社会

政治学者 Tronto が、ケアの5つの局面の最終段階として提示したものである。Tronto 自身は、ニーズ充足の方法が「正義、平等、全ての人々たちにとっての自由という民主主義的なコミットと調和的であること」が求められる、というやや政治思想寄りの説明をしているが、一言で表せば、Caring with の関係が存在する社会とは、ケアリングのニーズとその充足の方法が民主主義的に調和的である社会なのだといえよう。本研究では、「気遣い合うケア」関係が存在する社会だと表現した。

(2)ケアを US（われわれ）の問題と捉える社会

この self—us—public の関係性を指摘したのは、ゲストスピーカーとして研究会に招聘した、寝屋川市民たすけあいの会の富田昌吾氏である。「病める社会」にあって、ケアが必要であること

についての本人や家族のその気づきがあったとしても、そのことを共感することは困難であり、us のないまま public すなわち制度的な解決になってしまう状況が報告された。共感、連帯することが困難になっている社会状況とは、格差や孤立・孤独の広がりが見取され、それが分断となつてあらわれている社会を端的に表している。ケアを誰もが us と捉えられる社会とは、トロントの言葉を借りれば、「ケアが中心」に来る民主主義の社会であろう。ケアを「私たちの問題」と考えることのできる意識へと変容させることができるのかが問われている。

(3)「応答しあう関係性」にケアの可能性が開かれた社会

応答しあう関係性は、(1)の *Caring with* の関係性が有するものであるが、ここでは、ギリガンの議論を示しておきたい。ギリガンは、具体的な状況の中で発せられた他者からの声に応答する責任を重視し、具体的な関係性を取り結べない状態で誰かが放置されたままにあることは避けるべきだと主張する。また、「あらゆる人が応答され包含される、誰もが孤独な境遇や傷ついたままの境遇に放置されないというビジョン」を提起しているという政治学者齋藤純一の手放しの称賛（齋藤 2003）は、この関係性がケアにひらかれていることを示している。

(4).日常生活を支えるモデルが存在する社会

ここでいう「日常生活を支えるモデル」とは三井さよのケア論の根幹となる「ベースの支援」がケアを支える社会モデルである。サービス業（例えば家政婦）か専門職（例えば看護師）という二者択一でケア従事者を捉えるのではなく、新たなケアシステムを構想していくためには、ケアに従事するということが持つ意味を問い直し、生活モデルにもとづいてそのあり方を考えることが重要だと三井は提起する（三井 2018 : iv-v）。生活の質に価値がおかれる現代の社会においては日常に埋め込まれたベースの支援を考えることが求められる。価値の大きな転換を迫るものではあるが、「ベースの支援」の持つある種の「ゆるさ」に救われる面もある。

(5)ケアが民主的で変革的な「民主主義的な社会」の根幹に位置づけられている社会

この説明は、(1)の *Caring with* の関係が存在する社会の別様の表現である。ケアが小文字の政治に影響を受けることは容易に想像できるが、大文字の政治、すなわち民主主義的な社会のあり方とどう関係するかを想像することは容易ではない。しかしなぜ敢えてそれに挑戦する必要があるのだろうか。この容易ではない課題にチャレンジした Toronto の言説から以下の解答を得ることができる。

われわれが理想的な民主主義社会を実現させて、すべての人が平等と自由を手に入れるためには、すべての人がケアと自由のキャパシティを平等に持てるようなケア制度を設計し、たがいに依存しあって生きていくことを考えることが求められる。それは、反対、賛成という民主的なプロセスを通じて可能になるものである（Toronto2013 : 45）

いささか楽観的に過ぎると思われるこの言説からわれわれが学ぶべきことは、大文字の政治から逃げてはいけない、ということであろう。ケアをめぐる社会状況は厳しいが、本研究で議論した論者たちの言説には政治への信頼があり、そこに光明を見いだすことができた。事実と価値の間をつなぐ、次のステップに歩を進めたいと思う。

(6)本研究からの含意

本研究は、すでに多くの議論が存在するいわば「手垢にまみれた」テーマとしてのケアについて、改めて問い直したものである。共同研究者の議論の「ベース」となる学問領域は異なっており、議論の抽象度も異なっているが、あるべき社会を実現させるために「何を」「どうすればよ

いか」の考え方や方向性を示したい、という動機付けはそれぞれが同じように有していた。加えて、「ケア」とは「応答」したり「連携」したり「対話」したり、という関係性から成り立つもの、という認識においても一致していた。だからこそ、ケアについての岡野や三井の議論から刺激を受け、議論を積み重ねていくことができた。

本研究において、ケアを社会実装させるための統一的な見解を提示するには至らなかったが、各論者が今後のそれぞれの研究に接続させて、ケアをそれぞれの研究のアウトプットの中に潜ませていくことが、ケアを中心にした共生社会の実現のため、人びとの意識を変容させることにつながっていくものと考えている。

- 岡野八代（2012）『フェミニズムの政治学』みすず書房
- 三井さよ（2018）『はじめてのケア論』有斐閣
- 齋藤純一（2003）「依存する他者へのケアをめぐる」日本政治学会編『年報政治学 性と政治』第54巻,179-196
- Tronto, Joan C. *Who cares?* Cornell Paperbacks, 2015
- Tronto, Joan, C. *Caring Democracy*, New York University Press, 2013

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計9件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 5件）

1. 著者名 妻鹿ふみ子	4. 巻 132号
2. 論文標題 コミュニタリアニズムは「地域共生社会」の実現に寄与できるか～M.サンデルの思想からの検討～	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 社会福祉研究	6. 最初と最後の頁 29-36
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 伊丹謙太郎，廣田智子，竹端寛	4. 巻 38号
2. 論文標題 共生社会構築のための基盤としてのCaring with(1) 連帯を創出する	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 人文公共学研究論集	6. 最初と最後の頁 38-72
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 妻鹿ふみ子、大井智香子	4. 巻 38号
2. 論文標題 共生社会構築の基盤としてのCaring with(2) ケアの責任を問う～Caring withの関係性からの考察～	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 人文公共学研究論集	6. 最初と最後の頁 114-131
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 伊丹謙太郎	4. 巻 513
2. 論文標題 協同組合運動を軸とした賀川豊彦の思想と実践：素描	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 生活協同組合研究	6. 最初と最後の頁 21-28
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 伊丹謙太郎	4. 巻 667号
2. 論文標題 協同の精神を次世代につなぐー千葉大学協同組合論寄附講座、推進の5年間	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 協同組合研究誌にじ	6. 最初と最後の頁 88-95
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 竹端寛	4. 巻 23巻9号
2. 論文標題 「家族丸抱え」から「施設丸投げ」へ 日本型“残余”福祉形成史	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 学術の動向	6. 最初と最後の頁 34-39
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) https://doi.org/10.5363/tits.23.9_34	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 妻鹿ふみ子	4. 巻 29
2. 論文標題 「ボランティアからの卒業後」の着地点はどこか～オルタナティブな親密圏としての居場所を作るボーダーレスな関係性から考える～	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 日本福祉教育・ボランティア学習学会研究紀要	6. 最初と最後の頁 72-85
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 大井智香子	4. 巻 29
2. 論文標題 中山間地における高齢者の生活とコミュニティ持続に向けた取り組み	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 日本福祉教育・ボランティア学習学会研究紀要	6. 最初と最後の頁 59-65
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 廣田智子	4. 巻 24
2. 論文標題 人間の尊厳を支える介護職員のケア実践に関する一考察 ハイデガーの哲学を手掛かりとして	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 山口県立大学社会福祉学部紀要	6. 最初と最後の頁 27-38
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計7件(うち招待講演 1件/うち国際学会 0件)

1. 発表者名 妻鹿ふみ子
2. 発表標題 民主主義的なケアリングが要請するケアへの責任の割りあて Who Cares?
3. 学会等名 日本福祉教育・ボランティア学習学会第24回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 伊丹謙太郎
2. 発表標題 友愛の思想から見る協同組合連携の可能性と展望
3. 学会等名 日本協同組合学会第38回秋季大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 妻鹿ふみ子
2. 発表標題 誰もが支え合う「地域共生社会」とは
3. 学会等名 日本地域福祉学会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 妻鹿ふみ子
2. 発表標題 ケアとホーム・学校
3. 学会等名 日本福祉教育・ボランティア学習学会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 廣田智子
2. 発表標題 ハイデガーにおける「われわれ」と応答関係の成立について」
3. 学会等名 西日本哲学会第68回大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 廣田智子
2. 発表標題 ハイデガーにおける死と共同存在：「死へと関わる存在」から「死すべき者たち」へ
3. 学会等名 日本哲学会第76回大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 竹端寛
2. 発表標題 「家族丸抱え」から「施設丸投げ」へ～日本型”残余”福祉の形成史
3. 学会等名 社会学系コンソーシアム・日本学術会議第10回シンポジウム（招待講演）
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 竹端寛	4. 発行年 2018年
2. 出版社 現代書館	5. 総ページ数 243
3. 書名 「当たり前」をひっくり返す	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	廣田 智子 (HIROTA TOMOKO) (10707219)	山口県立大学・社会福祉学部・講師 (25502)	
研究分担者	伊丹 謙太郎 (ITAMI KENTARO) (30513098)	千葉大学・人文社会科学系教育研究機構・特任助教 (12501)	
研究分担者	大井 智香子 (CHIKAKO OHI) (60352829)	皇學館大学・現代日本社会学部・准教授 (34101)	
研究分担者	竹端 寛 (TAKEBATA HIROSHI) (90410381)	兵庫県立大学・環境人間学部・准教授 (24506)	